

石と一ん・さーくる

No.73

発行 新潟県石仏の会(代表 星野 紀子) 2010年9月15日 発行
 事務局 〒945-0837 柏崎市三島町16-2 渡邊三四一 電話0257-22-1941
 ホームページ <http://homepage3.nifty.com/sekibutu/>

石仏散歩

津南郷の庚申 あれこれ

津南町 桑原 和位

津南町全域の石仏悉皆調査を昨年終えて、庚申信仰関係の石塔の多いのに驚いた。数えてみると二百体を超える。昔から津南郷は庚申信仰の篤かった土地柄が窺える。

石に刻まれた青面金剛の像容は実に多種多様である。光背型か、自然石が主で全て浮彫りである。六臂の像が一番多い。他に四臂の像もある。大きさは四〇センチから一メートルを超えるものがある。庚申石祠では、入母屋造りが主で、寄棟造りの石祠は少ない。室部に二鶏・二猿、と二鶏三猿の二種がみられる。他に多様な筆跡で書かれた大小の文字塔もある。

青面金剛の掛け軸も様々である。江戸時代に庚申信仰が盛んになるにつれて、多様な絵が描かれたし、掛け軸も各地で販売された。講中で購入した掛け軸はバラエティーに富む。見せてもらった掛け軸は同じものはなかった。

庚申掛け軸を預かっておられる古老の方のお話では、昔は集落の中に庚申講中がいくつもあつたという。庚申を祀り、お互いの親睦を深めていこうという人たちの集まりで、年六度の庚申日には講中全員が集まり、庚申を祀る「オカネサマ」の祭礼は欠かさなかったという。

集落には「オオド」と「ナカド」に「コド」

があつた。オオドは旦那衆の講で、我々は仲間に入れてもらえなかったという(講の歴史がみえる)。

講中では、順番に「庚申盛り」を務めるのが義務であつた。子どもたちが「お庚申様です」と講中の各戸へ使いに出ると、各戸から野菜一品が宿へ届けるのが恒例であつた。「盛り宿」では大変である。季節の野菜料理の組合せを考えるのに主婦たちの苦労は並み大抵ではなかったという。



青面金剛像

庚申様をお詣りするのに汚れた体のままではいけないというので、入浴するのが絶対の条件であつた。盛り宿の主人は、まず自ら身を清め、庚申様の軸を掛け、飾り物をする。子どもの「二番使い」で、講中の人々は盛り宿へ行き、順番に風呂に入ってから、お茶に煎り豆を食して一服する。休息後、勤行が行われる。勤行には唱明取りを中心にして、般若心経、光明真言、お庚申真言を唱和する。勤行が終わると酒盛りとなる。夜食が出て庚申盛りの一切が終わるが、帰宅は翌朝が常だつた(今は簡略化されてしまつた)。

「弥彦燈籠まつり見学と良寛ゆかりの国上寺を歩く」参加記

長岡市 大楽和正

七月二五日午後二時、宿舎に集合し弥彦神社へ向かいました。はじめに宝物殿を訪れ、志田の大太刀などの重要文化財を見学。その後、弥彦神社のパワースポット・マップにも掲載されている「火の玉石」を見学しました。これは元和三年（一六一七年）に津軽藩侯が大鳥居を奉納した際に、一緒に納められたものと伝えられています。地元では「重い軽いの石」とも呼ばれ軽く持ち上げられれば願い事が成就する不思議な石です。私も含め会員の方々も軽く持ち上げることができ、見学会も幸先の良いスタートを切りました。

弥彦神社拜殿での参拝を終えると、回廊の両側には各講中の燈籠が納められていました。燈籠の土台となる部分は木枠に白紙を貼ったもので、この上に牡丹や菊、紅葉、桜などの造花が色鮮やかに飾られていました。造花とともに御神燈が二、三本立てられており、ここには講中名のほか、宿となる旅館

名が記されていました。各講中では宿泊や休憩場所となる旅館が決まっているようで、神社参詣の盛んな門前町らしい祭礼の特色だと感じました。

夕方四時半から「お櫛引き」があるため、一の鳥居前に移動。これは櫛の大枝を引き歩くことによって神幸の順路を清める行事です。氏子の子どもたちが引つ張りますが、ものすごい勢いで道路を駆け抜けていきました。

夕食後、松明行列があるというので少し早めに宿を出発。弥彦公園の前で打ち上げられる花火を間近で見物しながら、私は一人で一の鳥居前に行きました。ここでは二つの燈籠の押し合いが行われていました。この祭は別名「燈籠おし」とも呼ばれており、運良くその様子を見ることができました。

そこから燈籠巡行と神輿渡御の後を追って歩きました。燈籠は十字路などに来ると、若者が威勢よく燈籠を上下に揺



燈籠押し

さぶったり、回転させたりします。神輿渡御は神官や稚児、手持ちの燈籠を持った大行列で町内を練り歩きます。途中、住吉神社などの末社で立ち止まり、神職が祝詞をあげていきました。

最終的にこの渡御行列は、拜殿前の仮舞殿に向かい、祭りの中心となる「神楽の舞」「天犬の舞」が行われます。仮舞殿の周囲を燈籠が取り囲み、仮舞殿の上にも神職や氏子が人垣を作って、一般の見物ができないようになっており、会場は神事らしい厳肅な雰囲気にも包まれました。

二日目の日程は、猿田彦大神の石碑の見学から始まりました。これは弥彦神社

の神領の入り口付近に立地し、いわゆる庚申塔に神道的な意味が与えられて建立されたものようです。この猿田彦大神碑と後に見学した享和三年の紀



出羽三山塔

年銘をもつ大己貴命碑は、同じ石材が使用され、石に額を彫って神名を刻んでいる点も共通していました。また、宝光院で見た庚申講の掛軸も享和年間であることを考えると、何かしらの結びつきがあるのではないかと会員同士の話題に上りました。

そのほかにも乙子神社、国上寺、良寛が滞在した五合庵、妙多羅天女を安置する宝光院、賽の神の標柱、出羽三山塔などを見学することができました。こうした見学会に参加することは私にとって初めてのことで、会員の方々の石仏を観察する鋭い視点に多くのことを学ぶことができました。

「山古志郷大久保集落の信仰石像」

小千谷市 広井忠男

山は深く、雪も深い。江戸期より四十カマド（世帯）を固く守って来たこの山村も、高度成長期の過疎の進行で半分になった。さらに中越大震災で十三戸が長岡や小千谷に出、わずか八戸の限界集落となった。しかし信仰民俗は確実に守り継がれている。山の神・十二神（約五十センチ高）は、慶長十九年（一六一四年）に村の武左衛門家の隠居（若手に家計を一任し、近くに別居する親）茂右衛門が十二山に祀ったことが記録されている。建立年が明記されている石神としては越後山古志郷最古の一つと思われる。毎年三月十二日の山の神の祭礼十二講には、恒例の弓射ち神事が奉納され、無病息災、五穀豊穡、山仕事の無事が奉納される。女性は参加できない。

祭りごつつおは赤飯と天ぶらである。七五三の墨が打たれた矢の矢的に当たったり、巨木の梢にひっかかって落下して来ないと縁起が良いとされている。近年、東洋大学の調査研究班が十二講の取材に訪れた。集落の中央に村人が「香の木」と呼ぶ桂と櫨の巨木が周囲を圧して直立している。弓射ちはこの立木に向かって



十二山神 石祠

行われる。震災後、村人の信仰して来た神仏石像は樹下のお堂に合祀された。眼病治療が祈願された瑠理光薬師如来（約四十七センチ）は天保四年（一八三三年）生まれの川上与吉が中子山に祀り、四月八日にご命日祭礼。穀物、農神の祈願神正一位稻荷大明神（約五十七センチ高。二月初午が祭礼日）が十二山神、薬師如来像の隣に居並ぶ。

谷を挟んだ東（栃尾）側、山古志池谷闘牛場脇には赤山大明神の自然石（約一メートル）が立つ。郷内唯一の巡業神楽の民俗芸能を今に伝える大久保集落であるが、その創始者五十嵐米蔵が明治八年に建立した。震災御見舞で行幸された陛下の御製碑も立つ。

阿賀北の砂丘地帯を歩く(その一)

新潟地区 大木禊爾

新潟市から村上市にかけての海岸砂丘の石仏を訪ねてみようと思いたちまして、今回はその第一回ということで探訪会を実施しました。

五月二十七日(木)一〇時、聖籠町の運転免許センターを出発しました。参加者十五名。

○ 次第浜の庚申塚に丸彫りの石猿が六体あります。片手に宝珠か桃の実らしい物を持つもの、右手で耳のあたりをおさえるもの、両手を股間に置いているものなどユーモラスな表情をしています。

次第浜には一ツ井戸と称して水源がいか所しかなかったのです。子供たちは学校から帰ると毎日水くみをさせられました。今、その井戸跡のかたわらに弘法大師の文字塔が立っているのみです。

○ 村松浜には白いさらしを巻いた庚申塔があります。腹帯だそうです。安産祈願か、無事に生まれたお礼の意味か、いろんな願いを込めようようです。他地区にもこのような習俗があるのかどうか御一報いただけませんか。

村松浜の平野家は代々事業家として財を成したことで知られていますが、あの



村松浜 庚申塔

中浜万次郎と組んで小笠原方面で捕鯨をやった人もいた様です。天保の飢饉で窮民救済の為に多額の私財を投じて建立した金毘羅神社があります。村上のおしやぎり名匠を呼んで建てたといひます。桂のすばらしい彫刻や、行田海庵の描いた格天井の絵に一同歓声をあげました。

○ 聖籠山宝積院は聖籠町諏訪山にある観音霊場です。観音堂参道にある百庚申塔は明治三十一年当山の観音講の発起により造立されたものです。前庭の築山に中世の積石仏十五体があります。いわゆる出湯系仏です。

北蒲原から新潟市、五泉市にかけて無数に分布していますが、誰がどういふつもりで招来したものでしょうか。山門に



聖籠山 宝積院の積石仏

泰澄大師の作という、さらしをたすきがけに巻いた仁王像があります(どうも今回はさらしに縁がある)。これも又、安産祈願と病氣平癒を願ったものらしいです。

あいにくの雨で、なかなか計画通りにならず、だいぶはしょって三時三十分には帰着、解散しました。

太良兵衛の石仏案内を受けて

南魚沼市大月在住 鈴木洋之介

以前から石仏に興味を持っておりまして、故郷近郊から三魚沼へと探訪の範囲を広げておりました。たまたま津南の桑原和位氏と出会い、魚沼の石仏探訪を中心にいっしょに昨年からは楽しむ事になりました。

六日町というところ、太良兵衛の石仏が有名だから、その石仏探訪をしようと八幡集落の墓地からはじめました。資料を集め、その場に出かけ個体の位置の確認など大変な作業でした。でも場所によっては資料を超える石仏の発見は、作業の大変さを忘れさせてくれるものでした。

ちょうどその頃です、新潟県石仏の会の中越地区の加藤賢治氏から、太良兵衛の石仏の見学会を計画したので案内してほしいとの要請がありました。桑原氏から是非お願いしたいという要望もありましたが、会員でない私にとって困惑しました。

そしてお二人の強い要請に説得されて、では三人で新潟県石仏の会の皆さんに、十分にはできませんが案内しようということになりました。

太良兵衛の書き残された「大福細工覚

帳」によれば、三〇〇体をも超える石造物の数であり、すべてを案内することは不可能です。どこを案内するかを決めるために一通り巡回してみました。

案内する場所を絞り込むのは、欲もありませんでした。迷った末に、許される時間いっぱい案内する場所を次のように決



土沢集落にて太良兵衛の石仏調査

めました。

八幡・長森・下原・田崎・藤原・畦地・小川・舞台・清水瀬の集落としました。

善照寺や法恩寺、養徳寺、日吉神社にも立ち寄って、太良兵衛の石仏を鑑賞して頂くことにしました。日吉神社は、父の

石造物と太良兵衛の石造物を観て頂けるように組み入れました。また、お堂に祀られている太良兵衛の数少ない木造の仏様にもお会いして頂こうと思います。結果的には、南魚沼市の指定文化財である石造物も組み込むことができた、ほっとしています。

太良兵衛の石造物の建立された場所は、五十沢地区の狭い地域ですが、数は三〇〇点余りあります。石造物の種類も、駒形宏氏の資料「石工太良兵衛の作品数一覧表」にあるように多種類に亘ります。何とか一体でも多く観て頂きたいものと思いい、工夫を重ねました。

結果は、ご参加くださった方々の評価です。再度訪ねてご研究くださる方々には、少しでもお手伝いができれば幸いです。



八幡集落 如意輪観音像

事務局だより

◇下越地区石仏見学会のご案内

左記の日程で「村上市内の石仏巡り」を企画いたしました。昼食は鮭料理を満喫し、町屋見学もしますので、多数の皆様に参加をお待ちしております。

期日 十月三十一日(日)

集合 十時一五分 村上駅(羽越線村上着 十時七分)

解散 十六時 村上駅(羽越線村上着 十時七分)

昼食 割烹 新多久(鮭料理三五〇〇円)

見学地 羽黒神社・善澤寺(九品仏・磧石仏)、満福寺(九品仏・湯殿山塔)、長楽寺(九品仏・磧石仏)、安泰寺(九品仏・キリシタン燈籠・磧石仏)ほか

参加費 三五〇〇円(昼食代含む)

申込み 十月十五日までに岩野筆子へハガキかFAXで申込み下さい。

〒九五九―二〇三四 阿賀野市緑町二二八

FAX 〇二五〇―六二一〇〇七〇

◇上越地区秋の見学会のご案内

恒例の秋の見学会を左記のとおり実施

します。ぜひ、ご参加下さい。

期日 十月二十日(水)

内容 松之山郷の石仏探訪

集合 ①八時三十分 直江津駅南口集合→マイクロボスで出発。

②九時三十分 ほくほく線まつ

だい駅前(列車利用者昼流・出発)

解散 ①十五時三十分 まつだい駅前(マイクログル)

②十六時三十分 直江津駅南口

定員 二五名 参加費 三〇〇〇円

申込み やまだ漫歩まで(TEL〇九〇―四六二一―四一四九)

◇第一四回「石仏フォーラム」開催のお知らせ(概報)

今年もフォーラムの季節が近づきました。取り急ぎ、概要をお知らせします。後日、詳細案内を送付致します。

期日 十一月十四日(日)十時～十六時

会場 新潟県立生涯学習推進センター 2F・大研修室

新潟市中央区女池南三丁目一

二(県立図書館隣り)

第一部 調査研究報告十時～十二時

発表者二～三名(未定・募集中)

第二部 公開講演(十三時三十分～十五時)

講師 池田哲夫氏(新潟大学人文学部教授・民俗学)

演題「佐渡の暮らしと信仰」(仮題)

第三部 情報交換

申込み 後日、詳細案内ともに出欠返信ハガキを同封しますので、指定期日までに郵送願います。

◇新入会員 朝比奈トミ(上越市)

◇「石仏フォーラム」発表者募集!

前記、第十四回「石仏フォーラム」第一部「調査研究報告」での発表者を募集します。二、三十分程度の短い発表でも構いません。また「石仏との出会い」というような気軽なテーマでも結構です。ふるってご応募下さい。

編集後記

時々、程近い山あいの道端に湧き水を汲みに行きます。その傍らに三

体の石仏が、この夏の猛暑、酷暑もどこのことぞという姿で何時も変わらず涼やかにおわします。孫と一緒に

冷たい湧き水を茶碗に注ぎ、一、二病息災でと、お参りしてきます。

中越事務局 加藤賢治